

西田教授への弔詞

バーノン・レイノルズ

オックスフォード大学/
ブドンゴ保護フィールドステーション

初めて西田教授（「トシ」という愛称で呼ばれていた）に出会ったのは、私が1970年代後半にマハレを訪れた時のことでした。私は同僚研究者の杉山幸丸さんとダルエスサラームで合流し、一緒にタンザニアを横断してキゴマまで行きました。そこから私たちはマハレ調査隊のボートでタンガニカ湖を南下してマハレに入ることになっていました。しかしそのとき、ボートの船外機が故障しており、そのため、私たちはキゴマで数日間とどまることになりました。その間にトシと出会い、しばらく時間を共にし、彼の仕事やマハレのチンパンジーについて話をしました。結局その後マハレに入り、調査隊の人々やチンパンジーにも出会うことができました。そのときは気づいていなかったのですが、私は甲状腺機能低下症に罹っていました。日本人研究者たちは、私にひどく体力がないのに驚いて、ゆっくり歩いて、気配りの利く調査助手を私に付けてくれました。この旅行中にトシに会ったのは一度きりだったと思いますが、その甲状腺の問題があったためあまりよく覚えていません。

年を経て、日本やいろんな場所でおこなわれた会議で、私はトシと何度も再会する機会を得ました。そのたびに、彼の深い友情や、チンパンジーのためにすべてを捧げた姿勢に、強く印象づけられました。私はマハレのチンパンジーについての彼の本を読みましたが、実はそれは日本で開催された国際霊長類学会大会で私たちに贈ってくれたものでした。

私が鮮明に覚えている彼との思い出は、パリのユネスコ本部で、数々のチンパンジープロジェクトのリーダーが一堂に会し、「世界遺産種」という新しいカテゴリーを作って、類人猿をそのカテゴリーの最初の種にしようとしたときのことです。トシが指導的な役割を果たす中で、私たちは有益な議論をすることができました。その間に訪れたパリの小さなレストランで、彼と共に過ごした時間も忘れがたい思い出です。

何よりも、彼が開始して、現在も成功を続けている調査地であるマハレ山塊のチンパンジーに関する彼の業績とともに、彼の名はこれからも記憶されることでしょう。フィールド調査地を開設した人だけが知る多くの苦労がありますが、トシは彼の学生にとって最高の基準となるような、疲れ知らずのフィールドワーカーでした。彼は、洞察力のあるフィールドワーカーにとって不可欠な鋭い観察眼を備えた人物でした。また目標への断固たる姿勢と人なつこい性格や態度を兼ね備えた人物として、私には思い起こされます。

私たちブドンゴの研究者は皆、彼を亡くして残念に思っています。

ご家族の方々に心からお悔やみを申し上げます。

（翻訳：西江 仁徳）

学生時代の思い出

伊沢 紘生

宮城教育大学名誉教授

1961年に京都大学理学部動物学教室への配属が決ってから、'68年に同大学院理学研究科博士課程を退学するまでの7年間、西田さんとはずっと同期で同じ釜の飯を食べてきました。その間、公私にわたるどの局面でも、西田さんはいつも私の何歩も先を歩いていて、いつしかその後を追うのが私の生き方そのものになりました。西田さんは敬愛してやまない親友でした。

同期にはもう一人、加納隆至さんがいましたが、サルをやり始めた当初の頃、指導教官の伊谷純一郎先生が私たち3人をこんな風に評していたと、当時研究室の助手だった葉山杉夫さんから酒の席で聞いたことがあります。「あんな葉山、3人だけど、西田はせっかちな学究肌、加納はひょうきんな天才肌、伊沢は体力にものをいwertせた意地っ張り、そう思わんか」と。なかなかの的を射ていると、私はその時思ったものでした。

'62年の卒業研究で西田さんは、日本モンキーセンターが三河湾に浮かぶ無人の小島、野島に放飼中のタイワンザルを対象に選びました。すでに多くの研究がなされていたニホンザルとの比較がテーマでした。台風が続いて二つ通過した9月上旬の2週間、私は手伝いで彼と孤島暮らしをしました。宿舎はサルの糞がびっしり敷き詰められた小さな倉庫、明りはローソク、補給の船が着岸できず食事はカサガイとカメノテのスープでした。そんな夜、彼は両種のオスの行動の違いを丹念に説明してくれました。まだニホンザルを調査したことが全くないのに大変に詳しく、私は多くの文献を読み込んだ彼の豊富な知識に驚愕したのを、糞の臭さとともに鮮明に覚えています。

そのオスの問題が、西田さんの修士論文として結実したのは御承知の通りです。当時もう終わったと言われていたニホンザル社会構造論に果敢に挑み、村八分ザルとかボス争いの敗者と考えられていたハナレザルがじつはオスの正常な存在様式であること、すなわち群れは閉鎖社会ではないことを初めて明らかにしました。私が西田さんのこの画期的な研究の後を追って、ニホンザル社会構造論に私なりに一矢を報いるのは10年以上後の事です。

大学4年の、卒論発表が終った'63年3月、西田さん



と私が中心になって3週間、NHK テレビ「日本の自然」の撮影協力兼調査で、当時は幻に近い存在だった“北限のサル”を下北半島南西部で追いました。撮影、調査とも首尾良くいって、終了後に伊谷先生から、報告書をまとめ、文化庁に天然記念物申請をするよう言われました。頑張って報告書を完成させ、やれやれと私が夜毎酔い潰れている間に、当時まだ酒をたしなまなかった西田さんは、日本のすべての天然記念物について指定された経緯を調べ上げ、天然記念物に係わる法律や政令までチェックし詰っていました。ですから、対応した文化庁の担当官がたじたじになるほど説得力があった事もよく覚えています。この記憶が、私が後にニホンザルの保護や猿害対策に取り組む出発点になったのは間違いありません。

‘65年からの博士課程では共に東アフリカでチンパンジーの調査をしましたが、西田さんは難攻不落だったチンパンジーの餌づけに成功し、道具使用など知的行動をいくつも明らかにしました。その成果は驚嘆に値するもので、その後追いのいくばくかを私ができたのはずっと後“南米のチンパンジー”フサオマキザルの餌づけと知的行動の発見でした。

また西田さんは日常的に離合集散するチンパンジーにも明確な単位集団があり、しかも父系社会である事を初めて明らかにしたのですが、同様の社会構造を持つクモザルの調査を私が実施できたのは、フサオマキザル調査よりさらに後でした。

このような話は尽きませんが、私にとって西田さんは冒頭で述べたように、否応無く後を追わしめる存在であったわけです。

そのことは就職についても同じです。野島でタイワンザルの調査をしながら彼は就職についても真剣に考えていて、実際に朝日新聞社の入社試験を受けてもいました。彼の記者になりたいという才能は“北限のサル”を天然記念物にするための文化庁との交渉準備に存分に生かされていたと私は思ったものでした。もちろん実際に就職したのも私より先で、彼の東京大学への就職が決って、学生気分の全然抜けない私にあせりの気持ちが出たことを今は懐しく思い出します。

結婚についてもしかりです。‘63年の修士1年の夏、立教大学や東京女子大学等との合同で古代遺跡発掘という博物館実習が青森県三沢市の郊外で1週間実施され、私達も指導教官の池田次郎先生に連れられて参加しました。私は立教大の豊かな女子学生たちと自由時間にはわいわいと賑やかに遊んでいましたが、西田さんは知的で物静かで芯の強そうな東京女子大の学生たちの中に意に叶う理想の女性を見染め、彼女との結婚を実習終了直後から強く意識していましたし、アフリカに在る間もずっとそうでした。西田さんは彼女への愛を貫き、帰国後その女性北山晴子さんと晴れて結婚されるのですが、結婚についてもまた、私は彼の後を追う事になったわけです。

ただ一つ、私は日本でもアフリカでもアマゾンでも、彼と違ってかなりはちゃめちゃんな暴飲暴食の生活を懲りずに続けてきましたから、あの世へだけは私が先だと漠然とながら思っていました。しかしそれさえ、彼に先んじられてしまいました。

私にとっては掛替の無い本当にすごい親友でした。

御冥福を心よりお祈りします。

追悼—西田利貞教授

ウィリアム・C・マックグルー

ケンブリッジ大学

多くの方々が、彼の数々の貴重な科学的・学術的業績について書くことでしょう。マハレ国立公園、そこに生息するチンパンジー、そしてその保護・保全への彼の深い献身についても書くことでしょう。でも私はここで、彼との付き合いや友情について楽しかったことを、いくつかの個人的なできごととのかきで思い出したいと思います。

ウェンナー・グレン基金による2つの大型類人猿の会議（1974年のオーストリア・ブルクヴァルデンシュタインと1994年のメキシコ・カボサンルーカス）の両方に参加した霊長類学者は、ジェーン・クドール教授、西田教授と私の3人しかいません。彼と私は、74年の会議では最若手の参加者でしたが、94年の会議ではほぼ最長老であったと言ってよいでしょう。私たちは、折に触れて、ともに祝いのお酒を楽しんだものです。ローリー・オビンクが、カボサンルーカスでの最初の夜の夕食のあとのできごとを私に思い出させてくれました。西田教授は彼女に礼儀正しく頭をさげ、「どこかもう少しお酒を飲める所はありませんか?」と尋ねました。彼女はその願いを聞き入れ、私たちは一度ならず乾杯をしました。



シカゴで「アンダスタンディング・チンパンジー」会議のひとつが開催されている間に、リグリー球場でのシカゴカブスの試合観戦に彼を連れて行ったことがあります。彼は、じつはそんなに野球ファンではないと認めながらも、父親が野球の試合に連れて行ってくれたことを思い出していました。彼はその試合に集中し、球場の昔ながらの素敵な雰囲気を楽しんでいましたが、少しそわそわしているようでした。彼が本当に望んでいたことは、野球帽やペナントなど、とくに当時有名であったカブスのホームランヒッター、サミー・ソーサ関連のお土産を買い込むことだったのです。私たちは、両腕いっぱいにお土産を抱えて帰りました。

こうしたささやかな思い出は、決して色あせることはないでしょう。

(翻訳：花村 俊吉)